

「知事との元気まるごとトーク」(平成27年9月24日開催)

「知事との元気まるごとトーク」は、知事と地域で元気に活動している団体等の皆さんが、青森県の未来を創るために直接意見交換をする場です。

今年度第2回目の「知事との元気まるごとトーク」は、平成27年9月24日(木)に弘前市りんご公園で開催しました。

当日は、中南地域県民局管内の4団体の方にお集まりいただき、「幅広いものづくりに適した地(ものづくりチャレンジ人財)」をテーマに意見交換を行いました。

当日の概要をお知らせします。

※参加団体

- (株) 百姓堂本舗
- (有) 二唐刃物鍛造所
- (株) 木村食品工業
- (株) ソルテック

※ 当日、知事は、意見交換開始前に、会場内にある「弘前シードル工房 kimori」を見学しました。



【意見交換】

青森県知事 三村申吾

皆さん、こんにちは。

私たちの仕事というのは、地域産業を育成し、皆がその地域の資源を活用しながら生計を立てられるようにすることと、命を守ることだと思っています。

今日は、中南地域でそれぞれにチャレンジングなお仕事をされている方々とお話ができるということで楽しみにしてきました。

地域県民局という組織ができてから10年程経ちますが、より県民の皆様方の生活の現

場、生業の現場と行政が近い状態をつくろうということで、地域県民局が細やかに地域の実情に合わせた産業施策を進めています。

この青森県を元気にするために、皆さんが考えていることやアイデア、あるいは皆さんがやっていて面白いと思うことなどをどんどん自慢してください。そのことで周囲の方にも、仕事の多様性、ものの考え方の多様性、いろいろなことにチャレンジできる青森県、というのを示していきたいと思っています。

今日は、限られた時間ですが、ぜひ、皆さんからたくさんのお話をいただきたいと思えます。

中南地域県民局長

中南地域県民局は、先ほど知事からもお話がありました、組織ができてからちょうど10年目になります。まさに津軽藩のお膝元でもありますので、いわゆる伝統工芸から最先端の技術までを活かしたものづくりの拠点ということ、中南地域の大きな目標の1つに掲げています。

今日は、様々な分野でものづくりに励んでいらっしゃる皆様にお集まりいただき、現在、最も力を入れている部分やものづくりの現場を支える人材の育成、あるいは地域を活性化させるための取組などを中心に御意見をいただきながら知事との意見交換を進めていきたいと考えています。高橋さんからお願いします。

(株) 百姓堂本舗 代表取締役 高橋 哲史 さん

はじめまして。よろしくお願いします。

今日は、ものづくりというテーマで声を掛けていただきましたが、私はUターンしてりんご農家を始めてから13年目になります。その頃は、まさか自分がこういう製造業に従事するとは全く考えてもいませんでした。ちょうど今年、りんごが青森県に植えられてから140周年ですが、私もりんごを栽培するようになって初めて、りんごというものがどのように栽培されるのかを知りました。

私はりんご農家の生まれですが、りんごというのは種をまけば後は自然に大きくなり、収穫ができると思っていましたが、自分で栽培してみると、手を掛けなければできないということがわかりました。そこから剪定技術を学びましたが、今、私がやっているこの剪定の技術をずっとリレーで継承してきたということがわかりました。140年前にりんごが入って来た時はほとんどゼロのような状態だったところから、一つ一つ築き上げてくれたおかげで今、私たちはりんごを作っているのだということに気づき、これは面白い世界だと思いました。しかし、高齢化と後継者不足で周りがどんどんりんご農家をやめていく、畑のり



んごの木を切っていくという状態を見て、これは20年、30年後には大変なことになるのではないかという漠然とした不安を持つようになりました。

そんな時、平成20年の6月に1回、9月に1回、雹が降りました。幸い、私の畑には雹が当たりませんでした。ところが、ちょうど一緒に活動していた仲間達の畑が、打撃を受けました。結局、どうしても売り切れなかつたりんごが残り、ブルドーザーで穴を掘って埋めてしまったという経験から、何かやらなければいけないということでスタートしたのがこの「農家の庭先でシードルを」をテーマにしたプロジェクトでした。

平成21年に県で実施している「若手農業トップランナー塾」に入れてもらい、そこからスタートしましたが、その時に、お酒を造ったこともない、造り方も全く分からない状態でプロジェクトを始めるにあたり、まず最初に仲間が必要だと思いました。もちろん農家の仲間はいましたが、農家だけではできないプロジェクトだと思ったので、農家以外の人といかに知り合うかということを考えました。

一番最初に門戸を叩いたのが弘前商工会議所でした。まずは幅広い業種の人と出会えるのではないかと行って行ったところ、商工会議所青年部という組織があり、その会長が会ってくれました。そうしたら、「青年部に農家が入った前例はない。」と言いながらも、すぐに入会を勧めてくれました。その後、仲間が1人増え、2人増え、最終的には22人に拡大し、ようやく形になりました。

このシードル工房を開いて、間もなく1年半になりますが、訪れるお客様の話を聞いて、やはりそうだったのかと思ったことは、りんごの現状というのをほとんどの方がご存じないことです。

知事

地域の方も、場合によっては農家の方でもということですか。

高橋さん

そうです。日本一のりんごの産地なので、弘前からりんごがなくなるはずがないと思っています。



知事

そうですか。景色の中、生活の現場に当たり前に存在するからなのでしょう。

高橋さん

そうです。だから、20年、30年後にはりんごが半減してしまうというような危機感は、全くありません。かつ、りんごに対するイメージが、私たちりんご農家の感覚と離れているところがあると思いました。

というのは、例えば、私が合同コンパに行った時、「りんご農家です。」という話をすると、途端に女性の視線が、何か、かわいそうな人でも見るかのように変わります。りんご農家は大変で、いいことなど何一つない産業だと思われていることがわかりました。

ニュースで取り上げられるのは、台風でりんごが落ちたとか雹で傷がついた。最近だと、りんごが盗難に遭ったことなど。このような情報から、ネガティブなイメージで見られているのだらうと思いました。だから、りんご農家をやめていく人たちを見ても「大変だからしょうがない。」という感じで見られているような気がしました。

一方、りんご農家の立場からすると、すごく面白い仕事だと思っているので、まずは、このりんごの素晴らしさをいかに伝えるかが課題だと思いました。ここのシードル工房では、もちろんお酒も造っていますが、むしろりんご畑の方にお客様をお連れして、例えば、剪定はこういうふうにやります、りんごの実すぐりはこのようにやりますなど、なるべくりんごの話をするようにしています。りんごでいかに楽しめるかというのを、ここでは伝え続けようと思っています。

だから、「これからは後継者がいなくて、大変になります。」とか、「りんごが安くて困ります。」などという、暗い話題を話してもしょうがないと思っています。やはり、楽しい入口というのが絶対必要だと思います。

りんごのことをよく知らない青森市の男子中学生がここに遊びに来た時に、今お話したような事を言ったら、すごく興味を持ってくれ、「りんご農家になるためには、りんご農家に生まれなければいけないのか？」という話になりました。でも、そういう子ども達が増えてくることによって、何とかなるのではないかと感じています。

だから、そういう人達を1人でも2人でも増やすように頑張っています。そのため、時には、あえて面白おかしくりんごについてお話をすることもあります。知事は、りんごの花言葉をご存じですか？

知事

わかりません。

高橋さん

りんごは、摘果で大体8割を落としてしまいます。残った2割がりんごになりますが、そのことに由来するのかわかりませんが、「選ばれた恋」と言います。

「選ばれた恋」なので、摘果で落とされたりんごは選ばれなかった恋なのです。

ただ、ご存じのとおり、摘果されたりんごは土に帰ります。それが3年、4年経つと、また次の花の栄養になる。だから、選ばれなかった恋も大事です。いつか選ばれますというような話をしています。シードルの話というのは、実は1割にも満たなく、9割以上がそのような話ばかりです。

でも、そのことで「りんごって、こんなに素敵なものなのだ。」というようなことを感じ

て、帰っていただくことができます。そういう地道な活動をしています。

りんごだけが商品なのではなく、畑やりんごのある暮らし自体が、すごく魅力的なものだということを知っていただきたい。そして、それがこんなに溢れているところというのは、世界中を探してもそんなにありません。昨日もここでコンサートを行いました、りんごの木の下で音楽を聴いたり、お酒を飲んだりすることは、例えば、東京では絶対できないことです。

だから、そんな豊かなものが地元にあるということを知っていただきたいという思いで、活動をしています。

知事

ポジティブ感がいいですね。

県で実施している「若手農業トップランナー塾」に参加してくれて本当に良かったと、改めて思います。実際、「若手農業トップランナー塾」には、何か面白いことをやりたいと考えている方たちばかりが集まってくれていますので、そういう人達が青森の農業の在り方を変えつつあるとすごく感じています。

特に、本県はUターンや新規就農者が増加しており、野菜、米、りんご、それぞれの分野で、次の時代を引っ張ろうという思いのある若い人達が出てきました。

県としても、市町村や関係機関と引き続き連携しながら、就農相談から就農準備期、就農初期、就農定着期までの各段階に応じてきめ細かく支援していきたいと思っています。

農林水産部構造政策課職員

「若手農業トップランナー塾」については、今年も16名の方々に参加していただき、一生懸命やっているところです。(株)百姓堂本舗の高橋さんは、現役塾生の目標とされていますので、今後とも御協力をお願いします。

高橋さん

例えば「若手農業トップランナー塾」など、農業従事者を育成するシステムは、かなり手厚いと感じますが、果樹の場合、新規就農は、ほぼゼロです。つまり、木を植えてから30年後じゃないと商売にならない世界に新規参入するのはなかなか難しいので、そこをどう増やすかがこれからものすごく難しいと思います。



農林水産部総合販売戦略課職員

農業というのは天候、病気や害虫の発生に左右されますので、どうしても軸足を生産の方

に置かざるを得ないところがあると思います。そういう中で高橋さんの場合は加工も手がけていらっしゃると思いますが、なかなかそういう事例は多くないと思っています。

生産者の方にどんどん6次産業化に取り組んでいただくためには、委託加工、地域としての6次産業化を進めていくことが必要だと思っています。

知事

県では、地域そのものが皆で技術も人も出しあい、支え合う、そういう方向性になることが大事だと考えています。地域の農林水産業の中核を担う経営体が、他産業とも連携しながら、農山漁村の持つ地域資源を生かした経営活動を展開することで、地域の経済・社会を支える「地域経営」という仕組みづくりを進めています。

中南地域県民局長

それでは吉澤さん、よろしくお願いします。

(有)二唐刃物鍛造所 刃物事業部長 吉澤 剛

当社は作刀拜命より350年以上の歴史を持つ鍛冶屋の名門で、私で8代目となります。鉄骨と刃物の二部門があり、鉄骨部門では、現在は弘前城曳屋作業に使用される鉄骨製作、刃物部門では作刀技術を応用したプロ、セミプロ用の包丁の製作を行っています。

私自身、元々後を継ぐ気は全然なく、以前は、りんごジュースを訪問販売する仕事をしていました。そういう経験も生かしながら、中南地域県民局で実施している若手職人の研究会に所属し、商品づくりからマー



ケティング、経営などの一連のことを学ばせていただきました。その時にも実は知事にお会いしてお話をさせていただいたのですが、その時からすると、やはりだいぶ考え方やかものづくりに対する姿勢が、自分で言うのも変ですが成長したのではないかと思います。

当初は、やはりやらされている感がありましたが、今は、創るということ、売るために何かを考えるというのが、すごく楽しくなってきました。

でも、せっかく創っても、やはり売ることができなければ、お金の換えなければ生業としてはやっていけないと感じる部分もあります。

今、刃物は、あまり必要とされていません。調理済みの食品が結構販売されていますので、包丁自体を持っていない家庭もあります。刃物は危ないというイメージがあったり、包丁を買い替えて使うものだと思っている人もいます。

知事

研いで、研いで、自分の代はずっと使うものなのに。

吉澤さん

そういうことを少し知ってほしいと思います。また、地元で包丁を創っていることを知らない方がとても多いので、そういうことも知ってもらいたい。私がどういうふうになれるか分かりませんが、微力ながら、地元で家庭のために刃物を創っていることを知ってもらいたいという気持ちで取り組んでいます。

知事

後継者としての責任感が出てきましたね。本当にこの社会をつくってきたのが鉄という文化で、それを利用した鉄の文明、それを担ってきたのが二唐さんだと私は思っています。

しかしながら、生活に必要なものは何でも簡単に安価に手に入り、使い終わったら捨てるということが一般的になってしまった状況の中で、伝統工芸を守ってきた人達の生活が厳しくなっています。

だから、県としても、ものづくり産業の発展やものづくりを支える技術者の育成を図るための取組を進めています。

商工労働部地域産業課職員

青森県には優れた伝統工芸品がありますので、再発見するという視点、それから販売を促進していくという視点から、「伝統工芸価値再発見プロモーション促進事業」を実施しています。

内容としては、県外のバイヤーの方をお呼びして、実際に伝統工芸を見ていただいたり、消費者の方に工房を見学していただいたり、実際に物をつくる体験をしていただくというものです。これらの取組によって取得した販売促進手法を活用し、展示商談会やタイアップ催事への出展に対する支援を行っています。

実際に商談会をやってみると、青森県の伝統工芸品は素晴らしいという評価をいただきますが、販売のルートをつくるまでが難しいところです。今後、事業を進める中で創り上げていきたいと思っています。



知事

県では、「攻めの農林水産業」を進めてきましたが、それは単に売り歩いているのではなく、販路、要するに商談システムをつくって実際にフェアをやってもらい、売れ筋を通常の

取引にし、それを軸にして売り上げを伸ばし続けてきました。食べものの分野については、だいたシステムづくりができましたが、伝統工芸品の分野については、なかなか難しいといったところですよ。

日本政府そのものも日本の伝統技術を伸ばしていこうとしていますので、県としても応援したいと思っています。

医療機器メーカーとの連携の可能性など、県として常に情報を収集し、適時に情報提供するということが大事だと思っています。伝統的技術を残していくためには、私たちが常に社会情勢を正確に把握し、各事業者に必要な情報をすぐに提供することだと思いますので、そういうことを頑張っていきます。

中南地域県民局長

それでは、辻脇さん、お願いします。

(株) 木村食品工業 執行役員 辻脇 悟志

当社は農作物の加工品の製造が中心で、元々は山菜の水煮がメインでしたが、そこから事業を拡大し、カット野菜、カットフルーツ、りんごのシロップ漬けなども製造しています。また、缶詰など常温で流通できるものから、乾物や冷凍品などまで幅広く行っています。

ところが、最近は、山菜の水煮、例えばワラビの水煮にしても、「どうやって料理をするんですか。」という電話がきたり、共同購入で生の根曲がり竹を買った東京の方からは、「料理法がわからないし、袋にも料理法が書いてない不親切な会社だ。」と言われたことがあります。

山菜を含めて、そういう農作物の原料供給、食材供給が厳しくなっていると感じます。家庭で包丁を使わなくなっているというのも、料理をしなくなっているためだと思います。



知事

調理の仕方、食べ方などが親から子どもへ受け継がれていないということですね。

辻脇さん

けれども、例えば、スーパーでは山菜のお惣菜が売られているので、需要はあるということです。そういう点で、私たちはお客様のニーズに対応できるように変わらなければならぬと思います。

以前は、山菜の水煮を製造して頑張っていますと言っていましたが、正直、最近は言い

くくなっています。

やはり青森県は、「りんご王国」なので、りんごの加工品製造にもっと力を入れたいと思っていますが、この地域のりんご加工会社で一番ネックになっているのは、やはり人手不足と従業員の高齢化に伴う作業効率の低下ということです。

そのため、当社では今年の春に、今、各業者が保有している機械よりも3倍ぐらい処理能力が上がるりんご皮むき除芯装置を国内で初めて導入しました。

知事

すごいですね。メーカーは、どこの国ですか。

辻脇さん

ドイツです。

知事

ドイツには、そういう素地があったのですね。

辻脇さん

元々はフランスやイタリアに結構あったようですが、それから分派して、そういう機械を造っています。

知事

この機械の導入により、非常に作業効率、生産性が上がるわけですね。

辻脇さん

今後、本格的に稼働しますが、逆に言うとそれだけの量を処理しなければ投資した分を回収できないので、本当に原料を買うのに必死です。

もう1つ、関東圏などの大手メーカーを含む食品製造業においては、円安に伴う輸入品の価格上昇により、輸入品から国内製造品への回帰を模索している状況です。

大手メーカーでも、例えば、これまでは中国で加工したものを輸入して新商品を出していましたが、国内加工に回帰しています。

知事

円安の影響が、そういうところにも出ているのですね。

辻脇さん

ですから、この先は、やはり最終商品の値段をもう少し上げないと、国内で加工しようと

しても難しいと思いますが、気運としては高まってきていますので、企業としてはコストをどうカットするのが課題になります。

知事

国内回帰するためには、人手が必要になりますね。

辻脇さん

今までは黒石市、平川市周辺地域からの採用者が多かったのですが、最近では岩木山の麓などの津軽地域から通勤する方が少しずつ増えてきています。ただし、残念ながら中途採用は、希望者が全く来ません。ですから、人材としては高卒の方が確保しやすい状況です。

今年の4月に入社した人が13名います。明日の入社試験も希望以上の人数が受験する予定ですので、その子達を、どのようにして3年後、5年後に向けて育てていくかということが大切だと思います。

3年後、5年後にはもう役職に就いてもらうということを言い、目標を持ってもらったり、中南地域県民局やNPO法人の協力を頂いて、人材育成教育を実施しています。

ここ数年、私も社員教育をやってきましたが、「何をやりたい？」と夢を聞くと、残念ながら答えが返ってきません。

私が20年前に入社した時の夢は、イタリアにF1を見に行きたいと言いました。未だに実現はしていませんが、それだけお金を貯めようという話をした記憶があります。そういう言葉が出てくればいいのですが、買いたいものと言ったらスマホを買い替えたいというような話ばかりです。それだけ若い人達が夢を持っていないということになると思います。

当社は全工場を合わせれば大体400人強の従業員がいますので、それだけの人材を本当に路頭に迷わせないようにしていかなければならないし、そういう意味では、今年はりんに特化して製造できればと思っていますところ。

私が就職した時には、食品業界は絶対潰れないからと父親から言われましたが、何が起るか分からない業界ですが、きちんと正しくやっていけば生き残れるし、生き残っていかなければならないという気持ちを持って、皆に説いていくしかないと思っています。

知事

率直に、いろいろ感じている話も含めて聞かせていただきました。路頭に迷わせない、そのためにどうあるべきかを考えて取り組んできた結果が、今の御社の状況だと思います。

就職の話がありましたが、地元の方がここはいい会社だと知っている、親が勤務していて、ここでこういうことが実現できたから自分も就職するというパターンが出てきています。



だからこそ、今、話をしてくれたように、夢を持ってもらい、将来に向かってチャレンジさせるというのは、とてもいい方法だと思います。

県では、6次産業化や農商工連携を進めてきましたが、その究極的姿として、販路だけでなく、流通システムを大改革しました。「ロジスティクス」と言いますが、原材料の調達から加工、製造、梱包、流通、小売、消費に至るまでのモノの流れ全体を最適化し、コスト縮減や競争力強化を実現しようと、かなり真剣に考えて段取りをしています。御社とは連携できそうな気がします。

農林水産部総合販売戦略課職員

加工の観点からお話させていただきます。海外からの回帰の動きがあるというお話がありましたが、今、県としては県外から県内へということで、県内での加工をどんどん応援していきたいと考えています。県内で生産されたものの約7割が県外に行つて付加価値がついているという状況です。



知事

百石で生産されたキャベツが、兵庫県でカットされています。そういう状況を残念に思っています。

辻脇さん

県内には、最終的な加工場所がやはり足りないのだと思います。

知事

問題は、そこです。お互いに、連携できるところを工夫しなければいけないと思っています。

中南地域県民局長

それでは、平井さん、お願いします。

(株) ソルテック 工場長 平井 俊之 さん

当社の本業は、金型などを造る製造業です。親会社は東京の墨田区にあり、そこは大正8年から、文字を彫る彫刻、工業彫刻を手彫りから始めた会社です。そういう親会社の元で子会社のソルテックが育ててもらい、現在、田舎館村で金型を造っています。



そういう諸先輩達から100年続く技術というのを私たちは受け継ぎ、今後も後世に残していかなければいけないという責任もありますし、それがなければ当社の土台がなくなる、地盤が崩れてしまうということも考えられます。ただ、その彫刻も今では国が実施していた技能検定も廃止になり試験も受験できないなど、伝統技術を継いでいかなければならない、もしくはそういうのがある時代を、誰もわからないのではないかと考えています。

だから、実際当社に来ていただいても、「ソルテックって何をやっている会社？」となってしまっています。

製造業というのは、お父ちゃん、お母ちゃん、息子さんとか少人数で営んでいる会社も多いので、私としても、技術を今後に残していくためにはどうしたらよいかということをも考えました。

私はこれから100年ソルテックが続いていくためには、やはりもう少し商売を宣伝したり、製造業が辛いものではなく、すごいものだアピールしていくことが必要だと思います。

本業というのは、もちろん1つは柱がきちんとできていてやっていかなければいけないものだと思うので、その次は宣伝をしなければいけない。宣伝をするためには、うちは彫刻がうまいと言っても誰も振り向いてくれないし、ましてや、よくわからない会社にこれからの若い人が入社してくるかといったら、まず難しい感じがします。3K(きつい、汚い、危険)分野です。

知事

最先端技術を取り入れて、すごいと思います。

平井さん

昔の技術を基礎の柱として、今後は最先端の技術ももちろん取り入れていかなければならないし、新しい設備もたくさん導入して、新しい技術にもチャレンジしていかなければならない。

知事

受け継がれてきた100年の技術と新しい技術を融合して、それを商品開発に生かすということですね。

平井さん

そうです。古い技術と新しい技術を取り入れないことには、当社は今後100年は続きません。ですから100年先を見据えたことをやっているためには、本業の技術の継承と新しい技術を取り入れての商品開発、それに併せて、やはり自社商品もなければいけないと思います。



知事

田舎館ソルテックとして、これが当社の融合技術の水準だといえる商品が必要だということですね。

平井さん

そうです。そこで、田舎館村役場がお城の形をしていて、実はプラモデルを作るには最高の形だということに気がつきました。なおかつ当社の地元でもあるので、こんな近くにいい建物があるのに、それをプラモデルにしないのはもったいないと思いました。また、プラモデルというのは本当に金型の技術の粋が集まっているようなものなので、田舎館村からソルテックを発信したいという気持ちや、ソルテックの技術を使って田舎館村を発信したいという気持ちもあり、プラモデル「田舎館村役場プラスチックキット」を製作しました。青森県内にプラモデルメーカーはおそらくないと思いますし、東北でも珍しいと思います。弘前大学の先生に聞いたところ、役場をスケールキッドでプラモデルにしたのは、世界初ではないかと言っていました。

次に田舎館村を発信するためには、やはりアテンドが必要だということで「いち姫」というキャラクターをつくり、そのキャラクターを運営するホビーチームをつくりました。ものづくりの本業との兼務でホビーチームの仕事もやっていますが、私がいろいろ働きかけたことにより企業とのコラボが実現し、仕事が大いぶ増えました。私としては自分達を発信するのではなく、青森県を発信する、田舎館村を発信するということで、いろいろな会社とコラボしていきたいと考えています。

知事

ホビーチームの従業員は、忙しいと言いながらも、働き甲斐を感じていると思います。

平井さん

イベントをやると結構土日が潰れてしまうので、本当に休む暇がないくらいです。

今年は、県立美術館で「成田亨 美術／特撮／怪獣」が開催されたので、成田亨さんのご遺族の方にご協力いただき、成田亨さんの彫刻作品「突撃！ヒューマン」の複製ブロンズ像などの製品を製造販売しました。

でも、そのようなコラボ製品を作っても、販売するのがなかなか難しい。メディアに出せば売れるかなと思いましたが、なかなかそうもいかず、販売ルートも流通ルートも全部考えてやらなければならないということを、今すごく反省しています。

知事

地域貢献したいという気持ちから始まったのですね。基礎技術と発展技術が融合した自社の最高の技術を伝えたいということと併せて、県としても、このような面白い取組は、もっとPRする必要があると感じました。

企画政策部広報広聴課長

確かに資金力や工場の設備力という面では、首都圏にかなわないと思いますが、知恵の面では首都圏も青森も同じだと思います。そこから出てきたアイデアをいかに実現するかということですので、いろいろな分野で様々な工夫をし、一所懸命頑張っていらっしゃる方々や取組を広報していくのも私たちの仕事だと思います。



知事

ぜひ、県の職員にも田舎館村で面白いことが始まっているということを知らせたいと思います。

平井さん

10月に台湾のエレクトロニクスの展示会にプラモデルを8日間展示してきます。県庁の方も一緒に行ってくれます。

知事

今日はこうして中南地域で、仕事も人生も思いっきり楽しんでいる、本気でやってくださっている皆さんとお話することができ、とてもうれしかったです。

やはり、青森県は「じょっぱり」と「もつけ」が自ずと集まり、自ずと何かやっている面白い土地柄なのだと実感しました。

私は若い人達に、この青森県がこんなにも人生を楽しんで生きることができる故郷だということをもっともっと伝えていきたい。そのために、県ではいろいろな仕組みで育成する、チャレンジしたいことを応援するというのを始めており、チャレンジする人間をさらに後押しするという気持ちでいます。今日の出会いをお互いによい方向に生かしていきたいと思えます。

県として、いただいたご意見を関係部局にきちんと伝え、そして、また連携しながら、課題の解決に取り組んでいきたいと思えます。ありがとうございました。

中南地域県民局長

今日は、非常に面白いお話も出てきましたので、私どもとしては、少し勉強をさせていただいて、また御相談したいと思えますので、よろしくお願ひします。

